

絆 芥川かおる 市政レポート

～KIZUNA～

第7号 広報誌「絆」
芥川かおる後援会
発行日：平成 26年 8月
事務所：座間市入谷4-1881-45
発行責任者：野口利夫



平成二十六年 第二回(六月)定例会

平成26年、第2回座間市議会定例会が5月30日から6月23日までの日程で開催されました。

私も市民の皆さまの代弁者として7回目の登壇の機会をいただきました。



(質問) 未来(あす)へのまちづくり

2050年代に全体人口が1億人を割り込むとも言われ、また、先日、民間有識者の組織、日本創成会議では、東京圏の集積がそのまま続き、同時に人口減少が進めば、全国の自治体の半数にあたる896市町村の行政サービスの維持が困難になると言われております。本市の場合は1都3県の東京1極集中圏にあり、また高齢化率はまだまだ全国平均から低いとはいえ、当面は、自然的減少にとどまるかもしれないませんが、ある時期を迎えることにより、地方とは異なり、一気に高齢化、人口減少が進み、決して避けて通れない深刻な問題であります。私は昨年の第4回定例会で、高齢者対策についての質問の中で、高齢化と並行して進んでいくのが住宅の老朽化、空き家問題だと発言をしました。日本の住宅の耐用年数が26年、30年といわれる中、1980年以前に建てられた住宅が全住宅の38%を占め、昭和30年代、

昭和40年代、日本の高度経済成長期であり、本市においても同時期に開発、分譲された地域が多く存在し、若い世代の人口が増加した時代でもありました。しかし、年月の経過とともに、その方々も高齢者となり、子供たちは独立し、市外へ転出、そこに残された両親が何らかの理由でその家から離れ、そこに空き家や、老朽化した建物が存在している状況であり、個々の問題としてさまざま理由はあろうと考えますが、行政として向き合っていかななくてはならない課題も内蔵していると考えます。高齢者が引き続き暮らし続けたい、若い世代が自分の育った家で住みたい、そして転入し住んでみたいと魅力を感じることが出来る市の創出に努めていくことが求められるのではと考えますが、このようなまちづくりは一朝一夕にはなりません。長期的なまちづくりプランが必要であり、専門家等の協力を経て地権者として行政が一体となり例えば多世代共生型のまちづくりを考えます。保育園、サービス付き高齢者住宅、自立型高齢者住宅、子供と高齢者が触れ合える機会をつくる幼老複合施設、あるいは若い世代にも魅力ある次世代型分譲住宅、マンション、その地域の拠点場所となる居場所など権利関係等の問題や行政としてどこまで介入できるかと同様な問題はあろうと思いますが市長の所見をお聞かせください。



(市長答弁)

本市においても高度経済成長に従って人口が急増したわけですが、開発がなされて、そこに移り住んでこられた方がいらつしやると、当然同じような世代の皆さんがそこに居住し、同様にやはり高齢化をしていくといったような課題もあるわけですが、市内を見まわしますとモザイクのように、全体的に高齢化が進んでいるところ、また新しく開発されたところは子育て世代が住んでいるところなどいろいろなポイントが点在しているわけです。しかし、そこで育てられた子供たちが今度は親御さんが住んでいらつしやるところから巣立って行かれた後の課題、今、放っておけばやはり子供は親もとを巣立って、よそに移り住み、残された親の世代が高齢化をして、単身ないしは高齢の夫婦の世代として残っていくような課題があるわけですが、ここに再度やはり戻ってきてもらうというものも一つの大きな課題ではないかと思えます。そこで議員からも、多世代共生型のまちづくりへの取り組みという質問をいただきましたが、全くそのとおりでございます。この町においては、先程も申し上げましたが開発型の分譲がどんどん進んでいった中で、非常にモザイク型にアンバランスになっている部分があり、きちんと色んな世代がその中に織りなして住まわれるような、町にしていくべきであると思えますし、そのためには、一連の取り組みが必要になると思えます。

(再質問)

座間に越されてきた方が『本当に座間って住みやすいよね』と言っていたんだけど、とがございませぬ。先程も述べましたが地方より遅れて高齢化が進むわけですが、子育てがしやすい町は、高齢者も住みやすいともいわれます。是非、先を見据え積極的に取り組んでいただきたいと思えます。

(市長答弁)

『座間って住みやすいね』と言っていたんだけど、これは本当にうれしい話でございます。高齢化が少し遅くやってくるという事実は、ある面では先進事例ですとか、その課題解決に向けての知恵というものを本当に絞り出すように取り組まれている市町がたくさんあるというふうな思いがあります。そうした事例をしつかりと受け止めさせていただきますながら、今後のまちづくりに生かしてまいりたいと思えます。

いつでも市民目線!
皆さまのお声をお聞かせください。
TEL: 046-240-7616

(質問一)

須賀川市との国内友好交流都市

昨年11月10日に本市と福島県須賀川市との国内友好交流都市の締結がなされました。須賀川市との友好交流都市に至った経緯として、市民の幅広い交流を通じて、文化、芸術、スポーツ活動など、市域を超えたさまざまな交流を進めるため、平成19年6月に市民13名による国内友好都市検討委員会が組織され、11月に候補地として須賀川市を選定し、選定にあたっては友好都市の交流の息の長い活発なものにするため、条件地の行政規模、人口規模がかけ離れないこととし、互いの身の丈の合っているようなところなど、このような中で各委員から15都市が推薦され、さらなる絞り込みが行われ、5市が候補地として残ったこととなります。この時点で5都市の姉妹都市、友好都市等の総合計画の位置づけや友好都市の計画の有無の考え方等の方向を確認した結果、須賀川市ともう1市から前向きな回答をいただき、ここで友好都市に求めるのは、都市との対称性が類似性か、2市の比較が検討され、1市においては人口、人口密度、産業、都市構造等座間市と類似する点が多くあり、行政主体の交流が期待できるものの、市民が主体となつて行うべきである友好都市交流においては、座間市とは氣候風土、産業構造などが異なり、対称性がある須賀川市が候補地として決定したとのことです。協定締結までの都市間交流は、行政間のみならず、民間の各種団体がさまざまな交流を結び、特に須賀川市にとつて、東日本大震災は尊い人命を失う不幸な出来事でありましたが、相手の顔

が見える支援活動として、市内企業を始め、中学生や消防団、商店街、市民の皆さまが支援の手を差し伸べたことが締結の大きな布石になったとのことでございます。しかしなぜ須賀川市と友好交流都市を締結したのかを理解していない市民の方が多くいるようにございます。今後、当局としてはどのように理解を求め、交流を深めていくのか、また、この友好都市交流を長く、そして深めるためには、小・中学生が交流を持つことが必要と考えます。

(市長答弁)
友好交流都市検討委員会
が設置され、
当時13名の委員で構成をされました。当時私も商工会長で委員長として



平成26年大風まつり

ことと携わっております。候補地には委員の皆さんと協議をし、最後に二つに絞られ、一つが須賀川市で、相手先については、当初は非常に対象性、類似性が高いところではありましたが、そういうところとやるべきか、それともちよつと離れているけれども全然違った要素を持っているところとやるべきなのかというところで議論が最後までなされまして、今後、圏央道の開通もあり、交通アクセスもよくなるということで、須賀川市さんに白羽の矢を立てさせていただきまして、その後、須賀川市さんに初めてお邪魔をしまして、当時、まだ藤沼湖のそばに三世代交流館というのがございまして、大変すばらしい施設

設、そして市内は大変インフラも整っており、バランスもいい、すばらしい街でございます。当時の相楽市長が、この福島県の中通りから、栃木県の北部にかけては非常に地震が少ないところであり、震度4以上の地震というのはほとんど記憶がないとの話でございます。首都機能の移転をなすがというふうな手を挙げたなどということも話に出まして、地震が少ないところだから災害時の応援などという部分でも、十分対応できるよという話を聞いた覚えがあります。そんなことがきっかけとなりながら、交流を深めていきたというところで提言をさせていただきました。しかし、皮肉な結果に3・11の地震において、大きな地震が少なくと言われたところが内陸部では一番大きな被害となり、そこに対して災害時の応援協定を逆の意味で締結するということは誰もが想像していません。この縁というものであり、これこそがやはり人の縁と同じように街同士の縁というものであり、その様な縁をひとつひとつ大事にしていきながら、友好交流がスタートした訳でございます。ですので積極的に市民にご理解をいただき、周知をしていきながら、相互に交流の輪を広めてお互いのウイン・ウインの関係を作ってまいりたいと思っております。

(教育部部長答弁)

須賀川市との小・中学校の交流につきましては、平成22年度に初めて須賀川市の藤沼湖自然公園のキャンプ場へ伺い交流が始まりました。その後は3・11の大震災によりキャンプ場も大きな影響を受け、そのような中で平成23年、24年度に震災からの復興を目指し本市の青少年たちが積極的に協力し、須賀川市の中学生を相模原市立相模川自然の村野外体験教室、ビレッジ若あゆみに招き、交流を深めることができました。平成25年度におきましても、県立足柄ふれあいの村において交流会を実施しており、今後も双方の状況を鑑み、情報交換、積極的な交流を図り、強い絆を深めてまいります。

(再質問)

今後、子ども達のつながりを図っていく中でお互いの伝統文化に触れながら交流を深められないものかと考えます。須賀川市は松明あかし、座間市は大風まつり。須賀川市では松明あかしに地元の中学生が積極的に参加

しており、各中学校同士で応援合戦のようなことも行っているように、また座間市におきましても、今年の大風まつりに、昨年に続き座間中学校の生徒と今年には西中学校の生徒も参加をしました。そういったことから、互いの伝統文化に触れ、交流を図れないものかと考えます。

(教育長答弁)

議員の質問を伺っていて、こんなことを想像いたしました。5月の大空に西中、座間中、そして須賀川市の中学生の風が大空に舞う。何と愉快なことかなと。松明あかしに座間市の中学生が参加して、8メートルの高さの松明に灯をともし、鉢巻をしながら。そして須賀川市では中学校3年生と2年生の応援団の引き継ぎ式が行われていることとです。そういう感動体験を共有する。子ども達にとつては何かをつかむ、そういう場面になっていくのかなと、大変興味深い提案だと思っております。今後よく研究してまいります。

青年部主催・芥川かおるに物申す!! 開催しました

5月28日(土)、「市政についてわからないこと・聞いてみたいこと・思っていること」などを芥川かおるにぶつけてみよう!という会を開きました。初の試みでしたがとても良い勉強になりました。次回も更に多くの方にお集まりいただき意見交換をし、市政に反映させてまいりたいと思います。

